

平成 31 年度（令和元年度） 浜高だより（2 / 28） 150 号

「初心忘るべからず」

校長 楡 木 伸 司

念願叶って教師になった時の「初心」と、初めて校長として 1 校を預けられたときの「初心」を、今、改めて思い返してみたいと思います。

初任校は俗に言う底辺校で、非行事故に日々追われ、生徒は劣等感や大人への不信感を抱えるも、承認欲求はとても高い状況でした。そんな中、素人の私が「野球部」監督を任され、生徒と一緒に汗水流して練習し、陽が落ちた後も最後までグラウンドのレーキがけをし続けていると素人顧問との間にも自然と信頼関係が生まれ、4 年間で部員は 27 人にまで増えました。チーム内に競争意識が芽生えだすと練習の質や自主性は向上し、冬場はスキーにて体幹を強化し続けたところ、3 年後には強豪校ひしめく旭川地区でベスト 4 入りし、初の全校応援をしてもらえるまでになりました。妻が TBS ドラマのルーキーズを見たとき、「これ、お父さんがモデル？」と呟いたほどです。

また、初めての担任では、当時は全学級で学級通信を発行していたことを受けて、私も日常の生徒の様子を知らせる目的で日刊発行していました。それが潤滑油となり、通信を介して生徒一人一人の思いを拾い上げて載せていった結果、生徒との会話が増え、保護者からも励ましの声をいただくようになりました。ただ、通信は万能ではありません。大切なのは教師が生徒理解を進め、彼らの行動や努力に対し、適切な評価を示すことであり、お互いの信頼関係の構築により、生徒にとって学校が安心できる居場所になるのです。

生徒が変わらないと嘆くときほど、実は生徒から見れば、先生たちへの不満が同時に吐き出されているときであり、当時の先輩から「生徒は鏡だ」と言われました。教師が彼らを理解し、評価し、大人として扱えば、彼らは立派に応えます。この体験は今、立場が校長に変わっても、色あせるものではありません。今後も校長として生徒が安心して過ごすことのできる学校作りを進めるとともに、職員へは生徒のためを思って「どうしたらいいか」と思い悩み、試行錯誤している時間こそが、実は教師としての成長を支える貴重な時間であることも伝えていきたいです。先輩の言葉が心に響きます。「水面に水滴が落ちるが如く、教師が真剣になって行動する姿は、必ずやその輪を広げていくものだ」と。今、経験に裏打ちされた「初心」をもう一度自身の財産とし、校長という職責を情熱を持って全うしていこうと思っています。

以上 34 字× 27 行 916 字